
野獣

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野獣

【Nコード】

N2997F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アフリカギニア湾に面したある国に来た『僕』。そこで聞いた人を殺す不思議な獣ムングワ。そのムングワにまつわる謎は。ムングワという謎の獣はかつてアフリカのタンザニアで目撃例がありました。

第一章

野獣

あれは僕がアフリカのとある国に旅行に行っていた時のことだった。

そこはギニア湾に面した多くの国の一つであった。僕はその地にいるという謎の多い生物について興味を持ちこの国にやって来たのだ。

「ムングワですか!？」

話を聞いた現地のガイドがそれだけで眉を顰めた。

「はい、ムングワですけど」

僕は何故彼が眉を顰めたのかわかっていた。

「あれに関わっちゃ駄目ですよ」

彼は流暢な日本語で答えた。何でも昔日本大使館にいたらしい。そこで日本語を覚えたという。

「何でも見つかったら最後切り裂かれて殺されると聞いていますが」

「はい。私の友人も奴に殺されました」

彼は目を伏せてそう言った。

「夜に飲んだ時ですけどね。友人が用を足しに街の林に入ったのですよ」

この国には公衆便所は少ない。大抵は草むらや林の中で用を足す。

「はい、林の中で」

僕はそこに突っ込んで尋ねた。

「ほんの数分位でしたかね。少し遅いな、と思って行ってみたらもうやられてましたよ」

「ムングワにですね」

「・・・・・・はい」

彼は力ない声で答えた。

「もう全身ズタズタでした。どんな残酷な奴でもあそこまではしな

かったでしょう」

「ズタズタですか」

僕はこの時一つ妙なことに気付いた。だがそれは今は言わなかった。

「はい、友人はそれでも何とか抵抗しようとしたのでしょう。死ぬ間にムングワの毛を掴んでいました」

「毛を、ですか」

「はい」

「その毛はどうなりました？」

「警察に渡りました。そして今は我が国の博物館に置いてあります」
「そうですか、博物館ですか」

僕はそれを聞いて頷いた。そして次には博物館に向かった。

「ほう、日本から来られたのですか。それは珍しい」

博物館に入るとそう言われた。この国では日本人は珍しいらしい。よく言われることである。

「はい、実はこの国の生物で興味があるものがありますので」

「おお、それは有り難い。我が国は野生動物の宝庫ですからな」
博物館員はそれを聞いて機嫌をよくした。

「何についてでしょうか？象にゴリラ、ライオン……。そうそう、動物園にはオカピもいますよ」

オカピとはキリン科の動物である。密林に住み首は短い。極めて貴重な生物である。

「オカピもいいですが」

僕はここで話を振った。

「ムングワについてお聞きしたいのですが」

「あれにですか」

館員の顔が急に暗いものになった。

「はい。こちらにムングワの毛が保管されていると聞きましたので」
「そこまで」

「はい。ガイドの方にお聞きました」

「そうですか、そこまでご存知でしたら」

彼は観念したようにして言った。

「ムングワの毛は」

そして後ろの棚から何かを取り出した。

「これです」

彼はケースの中に収められている毛を取り出し僕の前に出した。

「これがムングワの毛ですか」

僕はその毛を見てまずそう言った。

「ううむ……」

その毛は何かの毛に似ていると思った。

「豹の毛に似ているとお考えでしょう」

「はい」

博物館員に言われ僕は答えた。実際に先端が黒くなっているところからそれを連想していた。

「実際に私共も調べたのですが」

彼は顔を顰めて言った。

「これは実際に豹の毛でした。目撃例もありますが豹かライオンに似ているそうです」

「やはり」

それは聞いていた。

第二章

「実はこのムングワは二十世紀前半に既に目撃例がありまして」

「わりかし古いのですね」

「我が国が建国される前ですけれどね」

彼はここで少し哀しそうに微笑んだ。当時アフリカの殆どの国はイギリスやフランスの植民地であったのだ。

「すいません、それを忘れていました」

僕はそれを聞いて慌てて謝罪した。

「いいですよ、今はこうして独立していますから」

彼は普通のやさしい笑顔になってそれを手で制した。

「で、ムングワですが」

彼は表情を真摯なものに戻した。

「この生物が発見されたのはタンザニアにおいてでした」

「タンザニアで、ですか」

「はい」

タンザニアはアフリカ東海岸に位置する国である。この国からはかなり離れている。気候も風土も異なっている。

「そこで度々謎のネコ科の生物に人や家畜が襲われ殺される事件が起こりまして。その犯人ではないかと言われていた未確認生物なのです」

「それは聞いています」

僕はそれを学生の頃聞いた。そしてこの生物が再びアフリカに現われたと聞いてこの国へやって来たのだ。

「ある夜の犠牲者がそのムングワの毛を持っていたのですが」

「ここでの事件と同じように」

「はい」

彼の表情が暗くなった。

「それからこの生物のことが語られるようになったのです。謎のネ

「コ科の動物として」

「アフリカには多いですね、岩のライオンとか水のライオンとか」
「よくご存知ですね」

彼はそれを聞いて目を大きく見開いた。岩のライオンはアフリカの高く連なる山の上に棲むといわれる未知の種のライオンである。水のライオンはより不思議な種でサーベルタイガーに酷似した姿を持ちカバを追い回し殺すらしい。その本当のことはまだよくわかってはいない。

「確かにアフリカにはそうした未知の動物がまだ大勢あります」
彼は言った。

「ですがこのムングワは違うと私は思うのです」
「何故ですか」

「あまりにも行動が不自然なのです」
彼は懐疑的な表情で答えた。

「何故かこの生物は人や家畜を食わないのです。いつもズタズタに引き裂いているだけです」

「そういえばそうですね」

そのことは僕も以前より不思議に思っていた。

「それに長い間姿を見せませんでしたし。そのうえにタンザニアの話ですよ、遠いタンザニアでの」

彼はそれをやや強調して言った。

「我が国とは気候や風土が異なるのです。しかもあれだけ離れているのに」

東海岸から西海岸へ行くには相当な労力が必要である。ネコ科の生物としては考えられない移動距離である。

「私はこのムングワが巷で言われているようなネコ科の生物だとは思えないのです」

彼は強弁した。

「では何だとお考えですか!？」

僕はあらためて問うた。

「ネコ科の生物でないとしたら」

「はい」

彼は落ち着きを取り戻して話を再開した。

「これも以前から言われていることですが」

彼は再び口を開いた。

「何かしらの怪しげな秘密結社ではないかと考えます」

「宗教的な、ですか」

「はい」

彼は答えた。

「殺し方もそう感じさせるものがあります。ズタズタに切り裂くのはどちらかという人間です」

ライオンや虎はまず爪と前脚で獲物を張り倒しそれから牙をメインで使う。彼等の最大の武器はその牙と顎の力なのである。

「しかも五体満足である死体が多いです」

顎で引き千切る為であるうか。ライオンや虎に襲われた場合首や腕が引き千切られる場合が多い。

「それに爪の跡も異様に鋭いのです。到底獣のそれではないように」

「何かおかしいことだらけですね」

「爪は獣の跡らしきものもありますがね」

「複数あるということですか!？」

僕はそれを聞いてハツとした。

「ええ、まあ」

彼もそのことに今気付いたようだ。

「そういうことになりますね」

彼は答えた。

「最初は牙によるものと考えていたのですが」

「そこから唾液のあとは見つかりましたか!？」

「それは……」

彼は口ごもった。

「そこまでの詳しいことは警察になりますね。私ではわかりかねま

す」

「そうですか」

博物館での話はそこまでだった。僕はそこをあとにすることにした。

「お役に立てなくて申し訳ありません」

その館員は出口で僕に対して言った。

「いえ、そんなことはありません」

僕は彼を慰めるように言った。だがこれは本心であった。

「またこちらにお伺いすることもあるでしょうし。その時はまたお願いします」

「はい」

こうして僕は博物館を後にした。そして警察病院に向かった。

第三章

「ムングワの犠牲者ですか」

中年の医師が出て来た。そしてムングワの話を聞くと顔を暗くさせた。

「実は今年に入って既に五人の犠牲者が出ているのです」

「五人もですか」

「はい、今年に入って急に出て来たのです」

彼は暗い顔のまま言った。

「私も今までタンザニアの古い御伽噺だと思っていたのですがね。実際に目撃例もありますし」

「何でも豹かライオンに似た姿だとか。博物館でもそれはお聞きしました」

「その通りです」

彼は答えた。

「博物館では豹やライオンの犯行とは思えないと言っていました」
「でしょうね。我々もそう考えております」

彼の言葉は僕の予想通りであった。

「普通に考えたらです。豹やライオンの行動とはかけ離れております。しかし」

彼はそこで言葉を続けた。

「あの毛からも、そして牙によるものと思われる傷跡に付着していた唾液からも調べたのですが」

毛、と聞いて僕は次にくる言葉が予想できた。

「豹のものとしか考えられないのです」

「やはり」

僕はそれを聞いて頷いた。

「ですがこの行動は少なくとも野生の豹のものではありません」

「といますと」

「訓練されたものであると考えます」

「ここでも犯人の推測は同じであった。」

「ではそのムングワを使うものがあると」

「はい。被害者の中にはナイフのようなもので切り裂かれたとおぼしき者もありますし」

「ナイフのようなもの、ですか、爪や牙ではなく」

「はい」

僕はそれを聞いて考え込んだ。

「実は博物館の方が言っておられたのですが」

「何かしらの宗教的な一団が関わっているのではないかと仰りたいんですね」

「は、はい」

警察もそれはどうやら考えていたようだ。僕も急に言われて驚いた。

「それは我々も考えています」

彼は医者であると同時に警察関係の人間であるのでこうした話し方になる。

「ただ何処にいて何者なのか全くわからないのです」

「そうなのですか」

「貴方は日本人ですね」

「はい、よくわかりましたね」

僕はいきなり言われてまた驚いた。

「英語の発音でわかりますよ。日本人の英語と中国人の英語は異なりますから」

「そうなのですか」

それはよく言われることだが実際に聞いたことがないのでよくわからない。実際に僕も英語はあまり上手くはないのでたどたどしい言葉を使っているのだ。

「貴方の国へは一度行ってみたいとは思いますが」

「そうですね」

「はい。ではムングワに話を戻しましょうか」

彼はそこで話を戻してきた。

「わかりました」

彼の表情がもとに戻った。それにしても先程とは別人のように穏やかで真面目な顔である。

「私はどうもこの事件は何か裏があると確信しているのです」

「その宗教組織か何かがムングワと言われるものを操っていると」

「はい。ムングワはおそらく既存のネコ科の猛獣でしょう」

「単に訓練されているだけで」

「軍用犬のような感じで」

「ですか」

僕はそれを聞いて考え込んだ。

「しかし猫は犬に比べると訓練が困難ですが」

「それでもやるうと思えばできますよ。餌付けも可能ですし」

「それはまあ」

しかしライオンや豹を訓練するのは相当な労力が必要だが。それが可能な人間がいるとしたならばかなり特殊な組織だ。だからこそ宗教組織と思われるのか。

「そうした宗教組織に心当たりはありますか」

僕は尋ねた。

「いえ」

彼は首を横に振った。

「この国は多様な宗教が存在しております。大体部族ごとに。そしてキリスト教やイスラム教も存在しています」

「そうですか。その中にライオンや豹を崇める宗派はありますか」

「それはまず最初に調べたのですが」

「どうやら違ったらしい。」

「おそらくは地下に潜伏しているのでしょう。ですから容易に見つからないのです」

「そうなのですか」

これもカルト宗教にはよくある話である。

「タンザニアにムングワが現われた頃から宗教組織の存在は噂されていましたね」

僕はそのことを尋ねてみた。

「はい」

彼は答えた。実際に今宗教組織の話になっているのもそれが根拠だからだ。

「そうした組織が流れ込んできた経路等はありませんか」

「全く。少なくとも建国以来はありません」

彼は首を横に振った。タンザニアからここはあまりにも遠い。それは容易に調べがつく。

「余計に地下が怪しいということなのですが」

彼は顔を顰めたままである。

「ですが地下となると我々は捜査することができません」

「何故ですか」

「裏の社会の力が強いですし」

これは多くの国にある話である。彼等は国の上層部と結託している場合がありタチが悪い。

「それに地下世界は複雑に入り組んでいるのです。犯罪結社一つ潰すのにも多大な労力と犠牲がいるのです」

「そうなのですか」

これは望み薄だと思った。

「しかし捜査は続けますがね」

この言葉は強がりにはしか聞こえなかった。

「ムングワを捕らえないとこの国がその恐怖に支配されたままになりますから」

彼はそう言うとき窓の向こうを見た。もう陽は落ちようとし暗闇が近付いてきていた。

第四章

僕は宿にしているホテルに泊まった。この国ではかなり高級なのだろう。クーラーまである。

「さてと」

僕はシャワーを浴びベッドに入った。夕食はクスクスをワインで流し込んだ。クスクスとは小麦粉の粉の上にカレーに似たソースをかけて食べる料理である。美味い。それと駝鳥の肉だった。最近日本でも食べられるがこの方がよく食べるのだろうか。

そのまま眠ろうとした。ここで部屋の電話が鳴った。

「はい」

誰だろう、と思ったがまずは出た。それはガイドからだった。

「明日の予定ですか？」

僕はふとそう思った。だが違った。

「そんなんじゃないやありませんよ」

その声は不自然な程震えていた。

「どうしたんですか、追い剥ぎにでも遭ったのですか？」

この国ではまだそうした輩が出る。治安はまだいいとは言えない。

「追い剥ぎだったら私が叩きのめしていますよ」

「ハハハ、そうでしたね」

彼は腕っ節が自慢である。実際に腕相撲や力比べで負けたことはないらしい。

「人間相手だったらいいんですけれどね」

「まさかとは思いますが」

僕はその言葉を聞いて悪い予感がした。

「今さっき見たんですよ」

「何処ですか!？」

僕はすぐに尋ねた。

「そちらのホテルから暫くいった公園のところですよ。私もいますよ」

「すぐ行きます、気をつけて下さい」

僕はそう言う到着替えてホテルを出た。そしてガイドが言った公園に向かった。

公園まで駆けた。そして入口に辿り着くとガイドが待っていた。

「速いですね」

「駆けてきましたから」

僕は息を整えながら答えた。

「そしてムングワは」

「静かに」

彼はまだ息の荒い僕を宥めながら言った。

「着いて来て下さい」

そして僕を公園の中に案内した。

「最初は私も見間違いだと思いましたよ」

彼は少し恐怖に震えながら言った。

「本当に見間違いなんじゃないんですか？」

僕は少しかつかうつもりで言った。実際に彼は結構お酒が入っていた。

「そんなこと仰るんですか！？」

だが彼はそれに対し不快感を露わにした。

「言っておきますが私はお酒には強いんですよ。どれだけ飲んでも自分を見失うことはありません」

「そうですか」

口では半信半疑なふうに言ったがそれは本当のようだ。見たところ言葉も普通だし足取りも確かだ。

「だから余計にこうして言うんですよ、大体……」

「それでムングワを見たというのは何処なんですか！？」

長くなりそうだったので僕はそれよりも前に尋ねて言葉を打ち消した。

「はい」

彼もそれで話を中断した。

「あちらです」

彼はそう言うのと茂みの中を指差した。深い木々に覆われている。茂みというより藪だ。それもかなり深いものだ。

「この中に入るのですか!？」

見たところかなり危険だ。蠍や毒蛇が潜んでいそうだ。

「いえ、中に入ったら向こうの思う壺です」

彼は手を横に振ってそれを否定した。どうやらムングワはこの中にいるらしい。

「相手はライオンや豹よりずっと悪質なんですよ。こんなところで襲われたらひとたまりもありません」

「ですね」

ネコ科の多くは木の上からの攻撃を得意とする。ライオンや虎も木の上に登る。それを考えると茂みの中に入るのは極めて危険だ。木の上からでなくともこの深い藪では隠れるのも容易だとすぐに察しがついた。

「道から見ましょう。いいですか、何かあったらすぐに撃ちますよ」

彼はそう言うのと懷から拳銃を取り出した。

「はい」

僕は残念ながら拳銃は持っていない。だがナイフ位は持っていた。護身用に現地で買ったものだ。よく切れる。

「あまり使いたくはなかったのですがね」

「そんなことを言っている暇じゃありませんよ」

ガイドは僕の言葉を否定した。確かにそんな悠長なことを言える相手ではない。何しろ何人も殺されているのだ。

僕はガイドに連れられて道を進んだ。ガイドは茂みの中を探り続けている。

「いました」

そして足を止めた。同時に懷から拳銃を取り出した。

「ここですか」

僕も覚悟を決めた。そしてナイフを左手に持った。ゴクリ、と喉

が鳴った。

茂みの中を見る。見れば暗闇の中に何か蠢いていた。

「あれが……」

頭部を下に向けている。こちらに背を向けるかたちだ。見たところ何かを食べているようだ。

第五章

暗闇の中なのでよくは見えない。だがその姿は巨大であった。豹、いやライオンよりも遥かに大きい。虎でもあれ程の大きさのものはそうはいないであろう。熊に似た印象も受けた。

しかし明らかに熊ではなかった。それにしても身体つきが違いすぎた。しなやかで鞭のようだった。ネコ科の身体であった。

「はい、あれがムングワです」

ガイドは小声で僕に言った。

「気をつけて下さいよ、あいつはかなり勘がいいですから」

何故そんなことを知っているのだろう、と思ったが彼は友人を目の前にいる怪物に惨殺されている。感情的にもそう思うのだろう。それにしても何を食べているのだろう。ここからではどうもわかりづらい。

「見たところかなり大きな獲物のようだが」

しかしこの街中で大きな獲物をいえば、どうも考えが及ばない。一体何であろうか。

ムングワが顔を上げた。そして口に何かをくわえていた。

「鳥かな」

見たところそのようである。一瞬人間かとも思ったが違うようである。

「この辺りは鳥が多いですからね。餌には困らないのでしょうか」

「そうですか」

ではやはり人間を襲うのは食べる為ではないのか。聞いたところによるとネコ科の動物は大抵人間を御馳走とは思わないらしい。彼等にとつてはまずいものであるようだ。

「やはり何かしらの宗教組織がいるのだろうか」

僕は考えた。そこでムングワはこちらに顔を向けた。

「おっと」

僕等は慌てて身を隠した。そして物陰から野獣を覗き見た。

幸い気付かれなかったようだ。ムングワは僕達に気付かず食事に戻った。

食事が終わると野獣はその場をあとにした。そして何処かへと消えていった。

「まさか本当にいるとは……」

この目で見てもまだ信じられなかった。

「ええ、私も見たのははじめてですよ」

ガイドはまだ身体が震えていた。

「えらく大きかったですね。ライオンでもあれだけ大きくはありません」

「はい、一体何なんでしょう」

「それは……」

正直わかりかねた。だが僕の知っている動物でないことだけは確かだった。

「今日は帰りましょう。そして朝になったら警察に行くことにしましょう」

「そうですね」

茂みの中に入る気にはなれなかった。蛇や蠍でもあるが何よりもムングワが潜んでいそうで恐ろしかったのだ。

僕達は周りを用心しながらその場を去った。そしてそれぞれの場所へ戻った。

翌日僕達は連れ立って警察に行った。するとあの医者がいた。

「どうしました」

彼は僕の顔を見て尋ねてきた。

「実は昨日……」

僕達は昨日の夜の話をした。彼はそれを聞いて顔を顰めた。

「そうなのですか。実は昨日も犠牲者が現われたのですよ」

「えっ……」

僕達はそれを聞いて慄然とした。

「貴方達がムングワを見たのは何時頃でしたか」

「確か………一時頃だったと思います」

「そうですか」

彼はそれを聞いて頷いた。

「ちよつと来てくれませんか」

そして彼は僕達に対して言った。

「何処へですか？」

僕達は尋ねた。

「事件が起こった現場です」

彼はそのまま飾らずに言った。有無を言わせぬ強い口調であった。僕達はそれに従うことになった。

僕達は医者に連れられ事件現場に来た。見れば僕達が昨日の夜ムングワを見た公園だ。

「ここか」

朝の日差しはもう強くなってきた。半袖でも汗が滲んできてる。その中に虫の音が聞こえる。そして木々が左右に生い茂っている。夜に見るのと雰囲気全然違うな

僕はふとそう思った。あの時はこの木々が化け物のように思えたが。

現場は僕達がムングワを見た場所と殆ど離れてはいなかった。すぐ側の木の下であった。

「これは………」

僕はそれを見て絶句した。それは若い男の無残な死体であった。全身がズタズタに切り裂かれている。喉は食い破られそこから血が噴き出したあとがある。そして手も足も爪か何かしら鋭いもので切られていた。

だが何処も千切られてはいない。そして全身をくまなく切られている。それを見て何か人間めいた犯行であるように思われた。

「これについてどう思われます」

「どうと言われましても」

正直に言わせてもらうと死体を見るのは今まであまり機会がなかった。ましてや殺害された人間の死体なぞ。見ていてあまり気分のいいものではない。

しかし気を失うようなことはなかった。僕はどうもこうしたものを見ても平気な体質のようだ。

「何者がやったように見えますか」

本当に率直に聞いてくる人だと思った。

「ネコ科でないとは思いますが。少なくとも野生の」
「やはり」

どうも僕がそう言うのを予想していたようだ。僕でもネコ科の習性はある程度知っている。これはネコ科のやり方とは到底思えなかった。

「人間がやったものに近いような気がします」

殺すのを楽しんでいるふしがある。これは全身をくまなく切り刻んでいるところからそう思ったのだ。

「ですね。前から思っていたことと同じです」

彼は言った。

「我々もこれは人間、もしくは人間の指示で起こった事件だと考えています。この殺し方は将に人間のそれです」

「ではやはり」

「ですね」

彼は僕の言葉に対し頷いた。

「おそらくこの国の何処かに潜んでいるでしょう。それも地下に」
「地下ですか」

昨日の話だとそこにいたらおそらく見つけ出すのは絶望的だ。

「こうなったら我々にも意地があります」

その言葉は意外であった。

「地下にでも何でも行ってみつけ出してやりますよ。そしてムングワを必ず仕留めます」

言葉には怒気が含まれていた。

「本気ですか!？」

僕も昨日とは様子が全然違うので正直驚いた。

「このままでは何人死ぬかわかりませんからね。上の方からも言われたんです」

(どうやらこの事件はこの国の上層部とは無関係みたいだな)

僕は咄嗟にそう思ったが口には出さなかった。

第六章

「では早速やるんですか」

「はい、徹底的にね」

彼の言葉は強いものであった。

「上の方から相当な圧力があつたみたいですね」

ガイドが僕にそつと囁いた。

「かも知れませんか」

僕もそれに相槌を打った。そういう見方もできた。

だが僕にはこれといって関係がなかった。僕はその日はガイドと一緒に博物館等でムングワについて調べて過ごした。

「この国にいるまでに見つかればいいんですがね」

僕は店でガイドとピーナツのシチューを食べながら話していた。

このピーナツのシチューはマリの料理だという。
なかなかいける。

「まあそうそう上手くはいかないでしょう」

ガイドは醒めた声で言った。

「そちらでも最近はそのでしょう？」

「ええ、まあ」

我が国の警察の検挙率の低下はやはり心配だ。

「けれど我が国は悪い事をしても捕まらないどころかそのまま刑務所から逃げちゃう奴がいますからね。日本の方がまだいいかな」

「いえ、そんなことはありませんよ」

僕はガイドのその言葉を否定した。

「確かに脱獄は滅多にありませんけれどね。そのかわり我が国ではマスコミや学者が犯罪者を擁護しますから」

「それは嘘でしょう」

彼は笑ってそう言った。

「いえ、これが本当に」

僕は手の平を振ってそう言った。

「信じられないことでしょうが」

ここで僕の顔はおそらく歪んでいたことだろう。

「証拠が見つかっていても冤罪はいけない、とか言うんですよ。そして犯人を無罪にしてしまうのです」

「酷いですね」

「それだけではありませんよ。その犯人がまた殺人をして捕まったんですよ」

「その人殺しを擁護していた人間は被害者に謝ったんでしょうね」

「まさか。また擁護していますよ」

「・・・・・・信じられませんね。少なくとも私には」

「残念ながら我が国の学者やマスコミはこういった手合いばかりなのです。少年が人を殺したらこの国ではどうなりますか？」

「死刑です。昔みたいに首を刎ねたりはしません」

「我が国では軽い刑罰で済みます。弁護士がその被害者の遺族の前で勝ち誇ってもいいのです」

「御言葉ですが」

ガイドは真剣な顔で僕に言った。

「弁護士や裁判官、学者といった職業を一新した方がいいかと。そんな酷い話をはじめて聞きました」

「僕も全く同じ意見です」

僕はガイドの意見に同意した。実際にこうした恥知らずで人権の本当の意味までも知らない輩が大手を振って歩いている。我が国の最も恥すべきことだ。

「まあそれは置いておきまして」

僕は話題を変えたかった。あの連中のことは考えるだけで不愉快だ。

「ムングワはこの街に住んでいるのですかね」

「嫌な話ですね」

彼はその言葉に表情を暗くさせた。

「しかし昨日出ましたが」

「はい。私もこの街の何処かに潜んでいるのではないか、と考えています」

「そうですか」

「しかし何処かまではわからないです。というかわかっていたらこんなところにはいませんね」

「それはそうですね」

「昼に出ることはないようですからね。昼間は何処かで息を顰めているでしょう」

「もしかすると道の隅にでも」

「怖いこと言わないで下さいよ」

「すいません」

ガイドが怯えたふりをして言ったので僕も微笑んで謝罪の言葉を述べた。だが彼もこの街ににいると思っっているようだ。

僕達はガイドと暫し別れある店に入った。そこは土産物屋であった。

「いらつしゃい」

小柄で痩せた老人が出て来た。

「何をお求めですか？」

「そうですね」

僕はふと日本にいる両親に土産を買おうと思った。

「これなんかいいかな」

ふと象牙に似た白い首飾りを手にした。

「おいくらですか」

言われた値段は驚く程安いものであった。

「本当ですか!？」

それには僕も驚いた。幾ら何でも安過ぎると思ったからだ。

「うちは儲かる商売はしていないんじゃないよ」

その老人は口をあけて大きく笑いながら言った。歯は一本もなかった。

「わしも歳じゃからのう。家族もないしこうして道楽でやつとるんじゃ」

「そうなのですか」

「そうじゃ。人生の最後位好きなことをしてもいいじゃろ」

彼は腰を伸ばして笑った。声はしわがれているがかん高い。

「じゃあこの首飾り下さい」

「うむ」

「あとは……」

僕は奥に置いてある豹の置物に気付いた。

「あれは大き過ぎるな」

「あれは駄目じゃ。店の看板みたいなものじゃからな」

「はあ」

僕はその言葉に答えた。

「ん!？」

ふとその置物をよく見た。それは置物ではなかった。剥製である。

「それ剥製ですね」

「おお、よく気がついたのう」

「そりやもう。あれだけ立派ですと」

こちらに向けて身構え牙を剥いている。今にも向かってきそうだ。

「まるで生きているみたいですね。それにやけに大きな豹だ」

「アフリカの豹としては大きいと言われたことがあるのう」

「そうですね。シベリアの豹位はありますよ」

動物は寒い場所にいる程大きくなる傾向がある。虎や狼等がその顕著な例だ。豹も例外ではない。

「そうか、そんなに大きいとはのう」

彼は嬉しそうにその剥製を撫でた。何かいとおしくてたまらないようである。

第七章

「この豹は生きていた頃はそれは多くの人間を食い殺してきたそうだがのう」

「人食い豹ですか」

「うむ。本当かどうかはわからんが」

よくある与太話である。少なくとも僕はその時はそう思った。

「わしはこの剥製が気に入っているのう。悪いがこれだけは売るわけにはいかん」

「わかりました。では他のものを買って満足するとしましょう」

僕はそれで納得した。そして幾らか買ってその店をあとにした。

それから僕はガイドと夜まで遊んでいた。ムングワが出るというので皆すぐに帰宅する。

「やっぱり街の人は皆怖がっていますね」

「そりゃそうでしょう。何人も死んでるんですから」

そう言う彼も早く帰ったそうである。

「では我々もそろそろ」

「はい」

この日はガイドの家に泊まることになっていた。彼は独身生活を満喫しているらしい。

「といってもちゃんと恋人はいますがね」

「今度合わせて下さいよ」

「そのうちね。へへッ」

どうも自慢の恋人らしい。美人を恋人に持つのは誰でも嬉しいことだ。

僕達は夜の道を歩いていた。月明かりが照らしていた。

「こういう日はムングワも出ないでしょうね」

「ええ。それに出来るだけ安全な道を選んでますしね」

彼も用心していた。そして道を足早に歩いていく。

「待つて下さいよ、早いですよ」

「やっぱり気になりますから」

どうやら彼も怖いらしい。

僕達は月に照らされた道を進んでいく。その時だった。

上の方で何やら呻き声が聞こえた。

「!？」

僕達は何だろうと思ひ咄嗟に顔を上げた。

だがそこには何もいなかった。いや、既にいなかったのだ。

奴は僕達の目の前にいた。そして牙を剥いていた。

「まさか……」

僕もガイドも絶句した。そこにいたのはあの野獣であったのだ。

「ムングワ……」

ガイドは震える声で言った。僕も恐怖で震えていた。

豹に似ている。斑点まである。そして均整のとれたしなやかな身体をしている。

だが大きい。まるで熊のようだ。昨日僕達が公園で見たのと同じであった。

まだあった。その目は血に飢えていた。野獣そのものの目であった。

「糞っ！」

ガイドは咄嗟に拳銃を取り出した。僕もナイフを出した。

ムングワは襲い掛かって来ない。僕達の間を窺っているようだ。

「グルル……」

唸り声をあげた。低くまるで地の底から聞こえてくるようだ。

僕達はムングワの目から視線を外さなかった。逸らしたら来る、直感でそう感じていた。

僕は右に、ガイドは左に動いた。そして奴の動きを少しでも攪乱しようとした。

僕は懐からナイフをもう一本取り出した。一本よりも心強いと思っただけだ。

ムングワは僕に顔を向けてきた。どうやら拳銃よりナイフの方が相手をし易いと思ったのだろう。

跳び掛かって来た。牙が僕の喉を狙っていた。

「危ないっ！」

その時だった。ガイドが拳銃を発砲した。僕を守る為だった。

拳銃はムングワの後頭部をかすめた。そして建物の壁に当たった。それで動きが少し変わった。ムングワは僕から動きをそらし後ろに着地した。

「こっちに！」

ガイドは僕を呼んだ。僕は咄嗟に前へ転がりガイドの横に来た。

「私から離れないで」

「はい」

彼がこんなに頼りになるとは思わなかった。僕は彼の側で身構えた。だがナイフではやはりいささか無理があった。

ムングワは後頭部の怪我をもとめせず僕達を睨んでいた。そして再び襲い掛からんと身を屈めた。

「また来るか」

ガイドは拳銃の狙いを定めた。

「今度は外さないぞ」

そして引き金を引こうとする。その時だった。

急に何か不思議な笛の音がした。ムングワはそれに反応した。

「笛の音！？」

僕達はその音色にハツとした。ムングワはそれを聞くと僕達に背を向けた。

「あ、待てっ！」

ガイドは発砲した。だがそれは当たらずムングワは夜の闇の中に消えていった。

「消えましたね」

「ええ」

僕達は顔を見合わせた。そして用心しながらガイドの家に入った。

第八章

翌日僕はまた警察に向かった。そして昨夜のことを報告した。

「よくご無事でしたね」

警官達は驚いた顔で言った。

「何とか。笛の音もありましたし」

「笛!？」

警官達はそれを聞いて目を見張った。

「はい、それが聞こえるとムングワは急に何処かへ行ってしまったのです。何かに呼ばれたかのように」

「そうですか、笛ですか」

彼等はそれを聞いて考える顔をした。

「犬笛はご存知ですね」

「はい、犬を操る笛ですよ」

僕は答えた。

「それと同じようなものでしょうね。ムングワを操る為の」

「というやはり奴を操る人間がいるのですね」

「間違いありません」

彼等は頷いた。

「おそらくムングワは何者かに操られているのです。その操っている人間こそが」

「今回の事件の黒幕」

「はい」

僕はそれを聞いて戦慄を覚えた。

「この街の何処かにいますよ、その黒幕が」

その中にはあの医師もいた。彼は窓の外を見ながら呟いた。

「そして邪な企みを胸に人の命を奪い続けているのです」

「何の目的で」

僕は問うた。

「そこまではわかりません。しかし」

彼は首を横に振ったあとで語気を強くした。

「それは人の世において許されるものではないことは確かです」

それだけはわかっていた。僕達は彼の強い目の光にそれに対する怒りを感じた。

僕達は警察をあとにした。帰り際に僕は拳銃を手渡された。

「用心の為にどうぞ」

「しかし」

僕はそれを断ろうとした。

「どうしたのですか？」

「僕は拳銃を取り扱う資格を持っていないので」

「それなら大丈夫ですよ」

拳銃を手渡そうとした警官は笑って言った。

「この国では銃を持つのに制約はありません」

「そうなのですか？」

「はい、何かと物騒ですからね。自分の身は自分で守る為にです」

「そうなのですか」

だがそれがかえって治安を悪化させているのではないかと思った。

「しかしそれでも」

だが僕はやはり断ろうと思った。

「そんなこと言わずに。またムングワに襲われたらどうするつもりですか？」

「しかし……」

僕はバツの悪そうな顔でそれを拒否しようとした。

「銃の扱い方も知りませんし」

「何だ、それでしたら簡単ですよ」

彼は笑って言った。

「え！？」

流石にその言葉には驚かされた。

「今から教えますね。簡単なことですよ」

彼はそう言うと言明を開始した。それはほんの数分のことだった。驚く程あつけなかった。僕は忽ちこの拳銃の扱い方を覚えてしまった。

「拳銃って思ったよりシンプルなんですネ」

「そうじゃなければ手頃に扱えませんか」

警官は苦笑して僕に言った。

「ううむ、それにしても」

僕は帰り道その拳銃を見ながらガイドと二人歩いていた。

「思ったより簡単な構造だったのですね」

「そうですね、むしろ貴方の国の銃の方が複雑です」

彼は笑いながら言った。

「それは自衛隊の銃のことですか？」

「はい、よくあんな複雑なつくりの銃を使っていますね」

「そうなのですか。僕は銃のことには詳しくないので」

「私は銃のことには興味がありませんからね」

意外にも彼はガンマニアのようだ。

「色々勉強したりしているのです。それで日本の銃についても読みました」

「そうだったんですか」

「私はあんな銃は使いたくはないですね。手入れが面倒だ」

「手入れ、ですか」

「おっと、馬鹿にしてはいけませんよ」

彼は顔を引き締めて言った。

「手入れを怠ると大変ですよ。暴発してしまうかも知れませんね」

「暴発、ですか」

急に手に持っている拳銃が怖くなった。

「そうです、部品一つなくしても銃は駄目になってしまうのですよ」

「案外繊細なのですね」

「そう、女の子のようですね」

彼はにんまりと笑ってそう言った。

「女の子みたいですか」

「そうですよ、そう言うかわかりやすいでしょう」

「はい」

彼の言葉に少し怖くなっていた僕の心が明るくなった。

「銃は細かい手入れをしておけばいいです。あとは簡単です」

「そうなのですか」

「今はそれよりもムングワのことを考えましょう。またすぐ出て来るでしょうし」

「僕達を襲いにですか」

「そうかも知れませんが」

今度は笑ってはいなかった。

「奴が私達の顔を覚えていれば間違いない」

「来るでしょうね」

ネコ科の生物は執念深いと言われる。ムングワもそうであろう。

「これからはその銃を常に身に持っておいて下さいよ。もしものはそれが最も心強い友人になります」

「わかりました」

その言葉には重みがあった。僕はその言葉に対し頷いた。

第九章

僕は昨日行った店に入った。装飾品がやけに気に入ったからだ。今度はガイドも一緒である。

「へえ、なかなかいい店ですね」

ガイドは店に入るとそう言った。

「そうでしょう、昨日入って気に入ったんですよ」

僕は答えた。そして彼に昨日買った品を見せた。

「これはいい」

彼はそのネックレスを見て目を細めた。

「実は恋人の誕生祝いを買わなければいけないくて」

「じゃあこのネックレスなんてどうですか？」

「彼女はネックレスはあまり好きじゃなくて」

「難しいですね」

本当だ。人の好み程わかりにくものはない。

「ではブレスレットなんかどうですか？」

僕は青いブレスレットを見せた。サファイアかと思ったが違うようだ。

「青いのより赤いのが好きなんですよ。情熱的だ、とか言って」

「そうですか。じゃあこれがいいですね」

僕はそう言うのと赤いブレスレットを見せた。

「あ、これはいいですね」

「じゃあこれで決まりですね」

「はい、他にも色々見ましょう」

彼はそう言うのと店の中の品物を色々で見回りはじめた。そこへ昨日の老人が出て来た。

「おお、今日も来てくれとるのか」

彼は僕達を見ると嬉しそうな顔でそう言った。

「ええ、いいものが揃っていますので」

「それは有り難い」

お世辞も込めたのだがそれでも嬉しいらしい。やはり彼も商いをする者らしくそうしたことを褒められると悪い気はしないようだ。

「ではこれなどはどうですか」

彼はそう言っていると僕達のところへ歩いてきた。そして品物を次々と見せはじめた。

「これはいいですね」

「これも」

僕達はそれを見ながら口々に言った。そして気に入ったものを次々と手にとった。

「有り難うございます。こんなに買ってくれるお客さんは珍しいですよ」

「いえ、そんな」

今度は僕達が逆に謙遜した。その時ふ老人の後頭部が目に入った。「!？」

見れば傷があつた。あまり深くはなさそうだが新しい。昨日か今日についたものであろうか。

（こんな場所にか。何かあつたのかな）

僕はそう思った。見れば何かが擦つたような細長い傷である。

（お歳だし用心して欲しいな）

僕はそう思った。だが口には出さなかった。

僕達は買いたいものを全て買つと店をあとにした。そして店をあとにした。

礼を言つて店を出た。その時店の奥にチラリと人影が見えた。

「他にも誰かいるのか」

それは若い女性のようだった。だが詳しいことはわからなかった。僕達は今度は博物館に向かった。そしてそこでも昨日のムングワのことを話した。

「熊みたいに巨大なネコ科の生物ですか」

館員はそれを聞き顔を顰めた。

「はい、何かご存知でしょうか」

僕は尋ねた。

「うっん……」

彼は考え込みだした。

「アフリカにはそんな巨大なネコ科の生物はいませんがね」

「ライオンも虎よりは小さいですね」

「はい、虎にしろ一番大きいのはシベリアの虎ですよ。動物というのは寒い場所の方が大きくなるのです」

「それはそうですが」

ゾウアザラシにしてもキタゾウアザラシのほうがミナミゾウアザラシより大きい。人も南方の人より北方の人の方が背が高い。欧州においてイタリア人とノルウェー人では背丈がまるで違う。

「アフリカには熊もいないと言われていますし」

これははつきりしない。いるのではないかという説もある。

「ましてやそこまで大きなネコ科となりますとねえ」

「心当たりはありませんか」

「残念ながら。本当にそこまで大きかったのですか？」

逆に尋ねられた。

「はい、それはもう」

「嘘を言っていると思われるのですか？」

僕はそれを否定した。

「いえ」

彼もそれはわかってくれたようである。

「どうやら本当のようですね」

「そうですね。僕達もこの目で見てまだ信じられませんから」

「本当に驚く程大きかったですよ」

僕達は口々に言った。

「それにしても熊のような大きさですか。かなり厄介ですね」

彼は顔を再び顰めさせた。

第十章

「そこまでの大きさですとちょっとやそつとでは倒せませんよ」

「拳銃じゃ駄目ですか？」

「お話にもなりません」

彼は即答した。

「熊にも銃は他の動物に比べ効果は少ないようですね」

「ええ、その毛のせいもありますが大きいですからね」

熊については僕の方が詳しかった。

「ライオンでも拳銃ではそうそう簡単には倒せませんよ。むしろ自殺行為です」

「そうなのですか」

「素早いですがからね。やはり遠くからライフルで狙うなりしないとそれはテレビ等でよく見る。実際にライオンや豹を狩るのはかなり危険な仕事だという。」

「近距離ですと散弾銃位持っていないと」

「またえらく物騒なものですね」

「私も一つしか持っていないですよ」

ガイドが言った。どうも彼は色々と持っているようだ。

「まあ拳銃は持っているだけでかなり違いますけれどね。ただし念のためにもつと強力なものを持っておくにこしたことはありません」

「わかりました」

「あとは・・・」

彼はここで顎に手を当てて考え込んだ。

「ムングワが何匹いるかですね。今のところ一匹だけのようですが」

「何匹いると思われますか!？」

僕は館員に問うた。

「私は一匹だけだと思います」

彼は答えた。

「被害者の傷跡は全て同じものなのです。そして同時に事件が起こったことはありません」

「成程」

僕達はそれを聞いて頷いた。

「ですが一匹だけでもかなり危険であることは変わりませんが」

「それはわかっています」

「そして夜行性のようですね」

ネコ科は本来夜行性のものが多い。

「いつも夜に出没していますね。事件が起きるのも夜です」

「そういえばそうですね」

「これでかなりのことがわかってきましたよ」

館員はそう言うのと微笑んだ。

「ムングワは一匹だけ、そして夜にしか出ない。そうとわかれば対処法もかなり限られます」

「ですね。要するに夜にだけ注意していればいいと」

ガイドはそれを聞いて言った。

「簡単に言えばそうですね」

彼は答えた。

「では夜に罠をはると」

「ええ。警察にはそう進言しましょう」

「それはいいですね」

「多分貴方達も協力することになりますよ」

「どうしてですか!？」

「発見者ですし実際に戦っていますからね。貴重な存在なのですよ」
正直嬉しくはなかった。またムングワと出会うのは勘弁願いたいことだった。

「多分貴方達に拒否権はないかと」

「・・・・・・でしょうね」

相手が警察だと諦めるしかない。断ってもいいことはない。僕達は仕方なくそれを了承することにした。

「運が悪いな」

「何かえらく不満みたいですね」

「うん、あまり警察というのは好きじゃないんです」

「それは私もですよ。いつも威張り腐っていますから」

「僕が嫌いなのはそういう理由じゃないんですよね」

僕はいささか顔を歪めて言った。

「じゃあどうしてですか？」

「いや、親戚に警官がいるんですけれどね。これがまたえらく真面目な人物でして」

「いいじゃないですか、警官は真面目なのに限ります」

「あまり度が過ぎると。正直あまりにも口うるさくて困っているのです」

何しろ常にガミガミ怒っているのである。朝早くから素振りをするのはいいがそれを家族にも強制する。僕も彼の家にいる時には必ずやらされる。僕はあまり剣道は好きではなくどちらかというとテニスやバスケが好きなのだが。

「それはまた」

「そんな人がいたら迷惑でしょう？酒も煙草も女も駄目だということですから」

「・・・・・・一体その人は何が面白くて生きているのですか？」

ガイドは不思議そうな顔をして僕に尋ねてきた。

「何でも正義を守ることとか。一歩間違えなくても正義の味方です」

「そんな人が本当にいるんですね」

「身近に持つと大変ですけどね」

これは全くの本音である。本人に悪気は全くないのだから手の施しようがない。最悪である。

何はともあれ捜査への協力だ。昼は事故現場の調査である。これはあまり問題がなかった。問題なのは夜である。ムングワの搜索である。

「僕達のグループは四人ですか」

僕とガイド、医者、そして引つ張って来られた博物館員である。

「こうして見るとチグハグなメンバーだなあ」

どう考えても戦える顔触れではない。ガイドは銃は得意なようであるが勇敢ではない。僕にしるはつきり言って何の戦力にもなりはしない。しかも医者と博物館員である。囧かと思った。

「実は私は密猟者の取り締まりをやっていたのですが」

館員がここで言った。

「え!？」

これには僕もガイドも驚いた。

「あの、密猟者の取り締まりといいますと」

日本にいるある作家もそれをやっていたという。かなりの体力及び格闘能力がないと務まるものではない。

「ですからある程度は戦えるつもりです」

「そうですか、それは有り難い」

これは本心からそう思った。こうした人がいると心強い。

「お医者さんはどうなのですか？」

「私ですか？一応以前軍にいたことがあります」

これもよくあることだ。軍医出身である。

「では銃の使い方とかは」

「はい、心得ておりますよ。それに警察におりますし」

「では貴方も大丈夫ですね」

「少なくとも自分の身位は守りますので」

では心配なのは僕だけとなるわけだ。とりあえず拳銃の扱い方は覚えたが。

「散弾銃お貸ししましょうか？」

ガイドが僕に言ってきた。

「お願いします」

僕はこの勧めを受け取った。正直自分の身だけは守りたかった。他の人に迷惑をかけるわけにはいかない。

僕達は夜の街に出た。そしてムングワが今まで出た場所を回った。
「こうして見ると出没する場所がかなり不規則ですね」

僕は地図を見て言った。

「普通は縄張りの範囲内で動くものなのに」

「この街全体が縄張りだとしたらどうでしょう」

館員がそれを聞いて言った。

「そうすればムングワがこの街に不規則に出るのかわかりますよ」
「ですね」

だとするとムングワの縄張りはかなり広いのだろうか。少なくともこの街全体を覆う程に。

今のところ線は引けない。縄張りの中心すらわからないのだ。

「出て来る場所の地形も決まっていますね」

藪の中に出ると思えば市街地にも出る。役所のすぐ側に出たこともある。

「今やこの街はムングワの家のようなものなのでしょう」

医者が出た。

「そして我々は奴の玩具なのです」

「殺される為の」

「……はい」

彼は僕の言葉に頷いた。

「忌々しいことですが今の状況はそうとしか言えません」

「ですね」

「そうした状況を打ち消す為にも我々は奴と奴を操る者を捕まえなければならぬのです」

僕達は彼のその言葉に頷いた。そして夜の街を進んでいった。

もう夜の街を歩く者は誰もいない。警官達の捜査チームが歩き回っているだけである。

「そちらはどうか」

医者はレシーバーで他のチームに声をかけた。

『異常なしです』

レシーバーの向こうから声が聞こえてきた。

「そうか」

医者はそうして他のチームに連絡をかけたが返事はどれも同じであつた。

第十一章

「どうやら今のところは何もないようですね」

「このまま出なかったらいいんですけれどね」

ガイドが息を出して笑いながら言った。

「それでは捜査の意味がありませんよ」

僕は彼に苦笑して言った。

「怖いですから」

彼は困った顔をして答えた。

「それはそうですね」

気持ちにはわかるがそれだと話をはじめられない。実は皆ムングワには会いたくはない。けれど見つけ出さないといけないのだ。よくあるパラドックスである。

僕達はそのまま街中を調べ回った。だがやはりムングワの影も形も見当たらない。

「今日は出ないのかな」

僕はふと思った。その時だった。

「!？」

小路に何かを見た。

「あれは……」

間違いない、店の奥にいた女の人であった。

「ここは店からはかなり離れているのに」

僕は不思議に思った。女性はそのまま小路に消えていった。

「どうしました？」

三人は僕に尋ねてきた。

「いえ、さつきね」

僕は店でみかけた女性が小路にいたことを言った。

「よりによってこんな時に……」

彼等は顔を見合わせた。

「小路に行きますか？」

僕は彼等に尋ねた。

「行かなくてはならないでしょう」

館員と医者はいささか強い声で言った。

「あまり行きたくはないですけれどね」

ガイドは情ない声で言った。

「これで決まりですね」

医者が言った。こうして僕達は小路に入った。

前は医者と僕が、後ろはガイドが見張っている。そして上は館員が見張っている。やはりムングワの奇襲が怖かった。

小路を出るとそこは街の裏道であった。左右に小さな塵が散らばっている以外は何もない。

「あれ」

医者が前を指差した。見れば一人の女性が前を進んでいる。

「あの人ですか？」

彼は僕に尋ねた。

「はい」

確かにそうだった。僕は頷いた。

僕達は追った。こんな時に一人でいるのは自殺行為だ。保護しなくてはならなかった。

裏道は今度は左右に分かれていた。すぐに見回す。右に見えた。

「それにしてもこんな道をよく知っているな」

ガイドはふと呟くように言った。

「私でもこんなところは知らないのに」

そういえば不思議だ。店から離れたこんな場所で一人で何をしているのだろう。しかもこんな時間に。

（おかしいな）

僕はその時妖気にも似た不吉な感触を覚えた。

女性は今度は左に消えた。十字路だった。僕達は左に曲がった。
「グルル……」

そこで後ろから声がした。

「まさか！」

僕達は一斉に振り向いた。やはりそこにいた。

ムングワだ。奴は血に飢えた眼で僕達を睨んでいる。

「クッ！」

三人がすぐに銃を撃った。だが奴はそれより早く跳んだ。

僕達の上に来た。そしてガイドに襲い掛かって来た。

「クソッ、離せっ！」

ムングワは爪で引き裂こうとする。しかしガイドは銃でそれを防ぐ。

「させるかっ！」

そこへ館員が蹴りを入れた。靴の先端で奴の顔に蹴りを入れる。

これはかなり効いた筈だ。奴は後ろに跳び退いた。

「大丈夫ですか！？」

医者と館員が前に出る。僕はガイドに駆け寄った。

「ええ、何とか。攻撃は受けませんでしたし」

どうやら無事だったようである。とりあえずはホッとした。

だが前にはまだ奴がいる。牙と爪を剥き出し僕達に襲い掛かろうとしている。

医者が発砲した。だがそれを壁を三角に跳びかわす。恐ろしい運動神経である。

そして僕達の背に来た。慌てて後ろを振り返る。

「何て身のこなしだ……」

流石にこれには困惑させられる。どうやらこの場所は奴にとっては格好の狩場らしい。

だが退くわけにもいかない。ここで遭ったが最後何とか始末しておきたかった。

それは容易なことではない。下手をしたら僕達全員奴の餌食とされてしまうだろう。背筋に冷たいものが流れた。

「気をつけて下さいよ」

医者は奴から目を離すことなく僕達に言った。

「軍用犬でもここまでの動きをするのはいませんよ」

「ええ、ライオンや豹でもここまでの奴はいませんね」

館員も言った。それは真実だろう。何よりも奴から感じられる気がそれを教えていた。

奴はとりわけガイドを睨んでいた。見れば後頭部の傷がまだ残っている。そのことを恨んでいるのだ。

「糞っ、さっさと死ねばいいのにな」

彼はそれを見て忌々しげに呟いた。

「俺はまだまだ楽しみたいってのによ」

そう言つと銃を撃つた。だがそれはかわされた。

ムングワは上を三角跳びの要領で跳んでいく。そして建物の上に消えた。

「来ますよ」

館員は上を見上げながら言った。僕達は身構えた。

何時来るか、それが問題であつた。おそらく奴は建物の上から僕達の間を窺っているのだ。

喉が鳴つた。唾を飲み干す音が聞こえる。

来た。やはり上からだ。

牙と爪を剥き出しにして降りて来た。まっすぐに僕達を睨んでいる。

「クッ！」

皆銃を乱射する。だが当たらない。

僕も身構えた。やらなければこちらがやられる。

僕はこの時はじめて引き金を引いた。そして銃が火を噴いた。凄まじい反動だつた。思わずその場に倒れた。

銃弾は散らばり奴に襲い掛かった。そしてその全身を傷つける。

「グオオオオオ・・・」

奴は無様に地に落ちた。全身から血を噴き出している。だが立ち上がった。そして形勢不利と見たか踵を返した。

「クツ、待て！」

僕達はそれを追って撃った。だがそれは当たらず奴は路の中に消えていった。

「しまった、逃げられたか」

僕達は齒噛みした。だが奴に深手を負わせることはできた。

「これで奴は暫くは動けませんね」

医者は路に残った血痕を見ながら言った。それは闇夜の中でも赤く光っていた。

「ええ、この血の量を見ると致命傷に近いですし」

館員もその血を見て言った。

「それにまた重要な手懸かりを手に入れましたよ」

それはこの血である。彼等はそれを見て会心の笑みを浮かべていた。

第十二章

翌日早速その血が調べられた。調べたところそれは豹の血とほぼ同じだという。

「という大型の豹でしょうか」

僕は館員に対して尋ねた。

「そう考えるのが一番妥当でしょうけれどね」

彼は難しい顔をしながら答えた。

「けれどあんな大きな豹となると」

「突然変異種であるとか」

「それは考えられますね。だとしたら説明はつきますが」

しかしそれでもやはり不自然であることに変わりはない。

「ところで奴は一体何処に消えたんでしょうかね」

今度はガイドが尋ねた。

「それが全くわからないのです」

ここで医者が僕達のいる研究室に入ってきた。

「わからないとは？」

「血痕が消えていまして。どうして消したのかはわかりませんが」

「そうですか」

建物の上から逃げたのだろうか。それなら納得がいくが。

「建物の上から逃げたかも知れませんか」

「それは今調査中です」

彼は答えた。

「そうですか」

僕は納得した。そしてあの女性のことを口にした。

「ところであの路にいた女性ですが」

「はい、私はそのことをお聞きしたいのです」

医者だけではない。他の二人も僕に顔を向けてきた。

「何処で見かけたのですか？」

それは重要な捜査の手懸かりとなる。皆僕の言葉に神経を集中させた。

「とある土産物屋なんですが」

「あそこですか」

ガイドはすぐにわかったようだ。

「どうやら貴方もご存知のようですね」

「はい」

彼は医者言葉に頷いた。

「ではすぐにそちらに向かうとしましょう。ただし」

彼はここで表情をさらに険しくした。

「変装していった方がいいでしょうね。顔を知られている可能性が高いです」

「ですね」

彼女がムングワと関係があるとしたら。そうした用心は必要であった。

僕達はその店に向かった。店は開いていた。

「いらつしゃい」

店にいたのはその女性であった。

黒い肌に黒くあまり縮れていない髪を持っている。すつきりした目鼻立ちに均整のとれた身体を持つ美しい女性だ。緑のシャツに赤いスカートを身に着けている。

（彼女だ）

僕はそれを見ですぐにわかった。だがそれは必死に心の中に隠した。変装しているといっても下手なことをしては気付かれてしまう。

「何かいいものはありますか」

僕達は旅行者を装って話を聞いた。そしてちよつとした買い物済ませると店を後にした。

去り際に僕は気付いた。彼女が首に何かしら細長い小さなものをぶら下げているのを。

「どうでしたか」

警察に戻ると医者は僕に対して尋ねた。

「間違いありませんね」

確信した。あの路にいたのは彼女だと。

「そうですか」

それを聞いて他の二人も頷いた。

「どうやら彼女がムングワと密接な関係があると見ていいですね」

「そう思います。ただ何故彼女が店に出ていたか不思議なのですが」

「どうしてですか？」

「いえ、いつもは老人が店番をしているのですけれどね」

「ほう、老人が」

僕はその老人について詳しく話した。

「そうですか、おそらくその老人も関係していますね」

医者はそれを聞いて言った。

「でしょうね」

館員もそれに同意した。

僕達はそれから今後の動きについて話し合った。結果今夜にも店に捜査に入ることとなった。

そして店に向かった。僕達は夜の闇に隠れるようにして向かった。

「行きますか」

「はい」

僕が先導を勤めた。そして店の裏口に回った。

見たところ怪しいところはない。ごく普通の店の裏である。

「表にも人がいるのですか」

僕は医者に対して尋ねた。

「はい、制服の警官達に向かっています」

「抜かりないですね」

僕は正直に感嘆した。

「当然です。相手は化け物ですよ」

医者は顔を引き締めて言った。

「化け物ですか」

「そう言わずして何と言いますか？」

「・・・・・・いえ」

これには僕も反論できなかった。確かに奴は化け物だった。

僕達は左右に散り扉の前に来た。そしてその扉をゆっくりとこじ開けた。

「いきますよ」

医者がかじ開けている。軍では特殊部隊にいたのであるうか。やけに手馴れている。

「行きましょう」

扉は簡単に開いた。どうもあまり大した扉ではなかったようだ。見ればかなり古い。

僕達は銃を構えながら中に入った。そして部屋の中を懐中電灯で照らした。

「気をつけて下さいよ。何時何処から襲い掛かって来るかわかりませんよ」

「・・・・・・はい」

医者の言葉は実感があつた。僕達は少しずつ手探りのような状況で進んでいった。

入口には何もなかった。見ればそこにも警官達が来ている。

「これで完全に包囲しましたよ」

医者はそれを見て満面に笑みを浮かべた。

「逃げられるものではありません」

かなりの自信があるらしい。闇夜の中に浮かぶ警官達の顔を見た。見れば精悍な顔立ちの者ばかりである。精鋭なのであろう。

次の部屋に入った。その後を数人の警官が続く。

そこは調理場であつた。見たところ誰もいない。

「油断は禁物です」

そこで館員が言った。

「ここは危険なものが一杯ありますから」

「確かに」

ガイドがそれを聞いて声をあげた。確かにここには包丁や鍋といった凶器となり得るものばかりある。

僕達はやはり少しずつ慎重に進んだ。ムングワが潜んでいるかと思つとやはり怖かった。

だが結局ここにもいなかった。すぐ側で音がする。どうも店の品物が置かれているところにも警官達が入って来ているようだ。

「開けますよ」

耳を澄ませてそれを聞いていた僕に対し医者^{イサナ}が声をかけた。見れば左の部屋の扉の前にいた。館員やガイドも一緒である。

「は、はい」

遅れた形になった。僕はすぐにその扉の前に向かった。

扉が開かれた。そして中に入った。

そこは寝室だった。粗末なベッドが一つと鏡や化粧道具等が置かれている。服は壁にかけられている。この国特有の長い服である。

「あの女性の寝室でしょうか」

僕は医者^{イサナ}に対して尋ねた。

「おそらく」

彼は答えた。そして早速部屋の中を調べはじめた。

くまなく捜した。だが何もなかった。

「何もないですね」

僕はベッドを調べながら言った。

第十三章

「どうも匂いますね」

色が違う部分を叩く。音が異なっていた。

「よく調べてみましょう」

その周りも調べてみた。するとやはりあった。

何とそこが外れたのだ。そして中から階段が現われた。

「行きますか？」

医者は僕達の顔を見て尋ねた。

「当然です」

ここまできてそれを断る者もない。僕達は意を決した。

階段を降りて行く。その後ろに警官達が続く。

全て降りた。そこは鉄の扉であった。

「いけますか？」

僕は医者に顔を向けた。

「任せて下さい」

彼はそう言うとその前に行った。そして鍵の前で作業をはじめた。すぐに開いた。そして僕達はその扉をゆっくりと開けた。中から炎の光が見えてきた。

ゴクリ

喉が鳴った。僕達は扉の中に入った。

そこは何かの祭壇であった。炎で部屋中が照らされ部屋の中央にその漆黒の祭壇がある。

その中心に巨大な木像が置かれていた。

「これは……」

それは巨大な豹の像であった。いや、違った。

「ムングワですね」

館員がそれを見て言った。そうだった。確かにそれはムングワだった。

「間違いないですね」

ガイドもその像を見て言った。

「けれど何故こんなところに」

「それは決まっているわ」

そこで女の声がした。

「まさか……」

僕達はその声が出た方を振り向いた。そこにあの女がいた。

彼女だけではなかった。あの老人もいた。全身に無数の傷を負っている。

「その傷は……」

僕はその傷に見覚えがあった。あの時の散弾銃の傷だ。

「そうよ、あの時の傷よ」

彼女は僕に対して答えた。

「祖父をよくも傷つけてくれたわね」

「祖父……」

僕は彼女の怒りに震える声を聞いて眉を顰めさせた。

「そうよ、祖父はムングワに姿を変えることができるのよ。偉大なる我等が神に」

「神……」

一種のシャーマニズムであろうか。にわかには信じられなかった。我々は古くよりサバンナで生きてきた。偉大なるムングワの庇護の下」

どうやらムングワというのは彼等の神のようだ。話からすると彼等は元々はサバンナで暮らしていた部族だったのである。

「しかしそれはあの愚か者達により壊された」

「愚か者!？」

僕はどうせ白人とでも言い出すのだろうと思った。だが違った。

「あの隣の部族の者達が我等が住処を奪ったのだ」

部族同士の抗争のようだ。これもよくある話だ。アフリカは多くの部族が分かれて暮らしている。中には今だに激しい抗争を繰り返

している部族もある。

「我等のとり方は一つ、血には血で清めるだけ」

「それがタンザニアで昔起こった事件か」

「そうだ」

これである時の事件の謎が解けた。彼等は復讐を行っていたのだ。

「ええ、ここにもないかな」

ガイドも館員も化粧鏡や服を調べている。だが結局何も見つからない。

「ベッドには結局何もないな」

懐中電灯を使って調べたが結局何も見つからなかった。今度はその下を調べた。

「ここにもないかな」

僕はその下にも光を当てた。やはり何もなかった。かに見えた。

「ん!？」

少し色が違う部分があった。

「床の色が違うのか？」

僕は最初はそれを単に貼りがえるありしたものだと思った。だが違うようだ。

ベッドをどかしてよく見ることにした。すると四角くその部分だけ色が異なっていた。

「どう思いますか？」

僕は他の三人をその場に集めて問うた。

「そうですね」

医者はその部分を手でコンコンと叩いていた。

「だが一つ聞きたい」

僕は問うた。

「何故貴様等はここにいる？貴様等の故郷はサバンナではないのか」

「知れたこと。ここにも仇がいたのだ」

「こんなところにも!？」

「そうだ、奴隷として売られる筈であつた者達だな」

「奴隷……」

それを聞いてガイドも医者も館員も顔色を暗くさせた。

かつてアフリカ西海岸は黄金海岸と呼ばれていた。それは何故か。奴隷貿易で潤っていたからである。

アフリカは長い間奴隷の供給地であつた。多くの黒人達が奴隷として集められ売られた。アフリカ系アメリカ人達もその祖先は奴隷であつた。彼等の多くは抗争により敗れ勝者に売られた者達だ。アフリカは決して一つの血で支配されていたわけではなかつた。

「だが彼等に罪はないだろうに」

「そうだ、彼等が君達に何をしたというのだ!？」

僕達は反論した。幾ら何でも奴隷としてここまで連れて来られていた者達の子孫に罪があるとは思えない。

「それは貴方達にはわからないことだ」

彼女は言つた。

「血の報復は永遠に続くものなのだ」

「血の報復か」

僕はそうした考えはあまり好きではない。あからあえて皮肉を言うことにした。

「では何故僕達を襲つた」

最初の襲撃のことを問い詰めた。

「それは決まっている」

彼女は落ち着いて言い返した。

「私達のことを嗅ぎ回っていたからだ」

「確かに」

僕もムングワに興味をもちここまで来た。それを否定するつもりはない。

「復讐を完全に終わらせる為に。邪魔立ては許さん」

「……そうか」

ここまでくると最早狂気である。どうやら殺戮そのものを目的と

するカルト教団ではなかったが考えようによってはそれよりも性質が悪いかも知れない。

「そして偉大なるムングワに傷をつけたその罪は重い」

「襲われて反撃するのは当然だと思うが」

「ムングワの手により死ぬ。この上ない名誉だとは思わないのか」

「全く」

正直狂ってると思った。そんなもの有り難いと思う人間がいるのだろうか。

第十四章

「………愚かな」

「少なくとも僕はそうは思わない」

ここまでできたらもう命も惜しくはない。思いきつて言った。

「そんな知りもしない過去の先祖のことで殺された者にとつてはい迷惑だ。無意味に命を奪われる者の身にもなってみるがいい」

「どうやら血の尊さがわかっていないようだな」

「少なくともあんた達よりはわかつているつもりだ」

僕は言い返した。

「血の絆は復讐とは関係ない。愛情とは関係あってもだ」

両親から教えられたことをそのまま言ったに過ぎない。だが血の報復よりは確実に立派な考えだと思った。

「あんた達のそれはただの虐殺だ。報復に名を借りた単なる殺戮に過ぎない」

「我等の報復をそのように愚弄するか」

「だったら反論してみろ。違うという反論をな」

「………許せん」

どうやらこれが反論のようだ。

「我々を愚弄するとは。最早生かしてはおけぬ」

最初からそのつもりはないだろう、と言いたかったが時間がなかった。彼女は首にかけてある笛を吹いた。

何やら空気を切り裂くような音が聞こえた。そして老人が急に姿を変えはじめた。

「いよいよか………」

僕達はそれを見て喉を鳴らした。目の前で老人の姿が瞬く間に変貌していく。

全身が毛に覆われていく。そして顔が変貌し豹のようになっていく。

すぐに四本足で立った。そして尻尾が生えてきた。

「グルル……」

そこには奴がいた。あの野獣、ムングワである。

彼女は再び笛を吹いた。ムングワはそれを合図に床を蹴った。

「ウワッ！」

僕達に襲い掛かって来た。負傷しているとは思えない素早さである。

「偉大なるムングワよ」

彼女は感情の籠っていない声で言った。

「その愚か者達を貴方に捧げます」

つまり僕達は生け贄というわけだ。たまったものではない。

ムングワは尚も僕達に襲い掛かって来る。左右に跳び爪で切り裂かんとしてくる。

「クッ！」

僕達は銃で狙おうとする。だがとても狙いを定められない。

あの女を狙おうにもムングワに手が一杯でそれどころではない。

その間に傷だけが増えていく。

「どうやらムングワの生け贄になる運命だったようね」

「何を……」

僕達は歯噛みした。だがとてもそれに対して言い返す余裕はなかった。

ムングワの攻撃は続く。それと共に僕達は傷を負い徐々に動きが鈍ってきた。

このままでは死ぬ、そう思った。何とかしなくてはならない。

（しかしどうやって……）

女を狙う余裕はともなかった。ムングワの攻撃を避けるだけでも必死である。

その時だった。扉の方から音がした。

「ここでしたか！」

警官達だ。どうやら僕達の助っ人に来てくれたらしい。

「探しましたよ。家の何処にもいないんですから」

「隠し階段はそのままにしておいた筈だが」

医者はそれを聞いて苦笑した。

「いえ、暗くて。中々見つからなかったのですよ」

「そうか、それにしても遅いぞ」

「すいません、けれどその分は働きますよ」

警官達はムングワと女に向かおうとした。

「君達は女を頼む」

医者は言った。

「ムングワは我々がやる」

彼は強い声で言った。

「それでいいですね」

それから僕達の方を振り向いた。

「はい」

ここで下手な犠牲を出すよりは。この四人で倒したかった。

僕達はムングワに向き直った。そして睨みつけた。

「いきますよ」

医者が奴を睨んだまま僕達に言った。僕達はそれに対し頷いた。

まず医者が発砲した。ムングワはそれを上に跳びかわした。

そのまま僕達に襲い掛かる。だがそこを館員の足が襲った。

格闘技という踵落とした。まず上に跳躍し振り下ろした。

それがムングワの脳天を直撃した。芸術的な程綺麗に決まった。

そこにガイドが銃を放った。直撃こそしなかったが奴の右眼を掠めた。

「ガッ」

ムングワが呻き声を出した。どうやら瞼のところで防いだらしい。しかし血が眼に入った。

それで見えなくなった。片目を失いさしもの奴も動きが鈍くなってきた。

それだけではない。見たところ女が警官達と死闘をはじめてから

その動きが少しずつ遅くなっている。どうやらあの女の笛によりコントロールされていたらしい。

「やはりな」

あの笛は犬笛と同じだったのだ。ムングワを意のままに操る笛だったのだ。

横目で女を見る。警官達を相手に棒を取り出し戦っている。見たところ彼女もかなりの戦闘力だ。

第十五章

しかし多勢に無勢だった。やがて息切れし捕まることだろう。

それよりもムングワだった。こいつを倒さないと話は終わらない。僕達は奴に銃を向けた。

奴が身を屈めた。力をためている。次の動きはわかった。跳んできた。予想通りだった。それも僕のところに来た。

これまでだったらかわすしかなかった。だが今はその動きがあきらかに鈍っていた。

「いける」

僕は咄嗟にそう思った。そして奴の開いた口に散弾銃を入れた。そしてトリガーを引いた。不思議と力は入らなかった。

すぐに衝撃が全身を襲った。僕はその衝撃に身をのけぞらせた。銃身から炎が吹く。それは奴の口の中を襲った。

無数の銃弾が奴の体内を荒れ狂った。流石にその中を守るものはなかった。

全身がまるで爆発したように膨張した。そして銃弾が皮を突き破らんと暴れ回る。

だがそれも止まった。ムングワはそのまま前に落ちていった。「終わったか!？」

僕はそれを見て呟いた。ムングワは前に倒れた。

そのまま動かなかった。さしもの化け物も体内を破壊されてはどうしようもなかった。

「お祖父様!」

女がムングワの死を見て叫んだ。だがそこに警官達が襲い掛かる。「クッ!」

だが彼女はここで信じられない力を発揮した。そして警官達を退けた。

そのままムングワへ駆け寄る。今までとは信じられない程小さく

なつたように見えたその亡骸を抱えた。

「これで我等の報復は……」

さしもの血の報復もムングワがいなくてはどうにもならないようだ。彼女の顔が絶望したものになった。

しかしそれは一瞬であつた。彼女はキツと顔を上げた。

「こうなつたら」

壁に飛び移り松明の一つを手にとつた。そして祭壇に投げ入れた。
「何っ！」

祭壇は忽ち炎に包まれた。それはすぐに地下室全部に行き渡つた。
「死してこの身を捧げるのみ。報復がなければ生きている意味もない」

「何と……」

最早そこには一欠の雑念もなかつた。最早それは絶対であつた。

「ならば死してこの身を神に捧げるのみ！」

信じられない速さであつた。彼女は炎の中に飛び込んだ。そしてその中に消えていった。

「何という女だ……」

僕は突然目の前で起こつたこの光景に我を失つた。暫し呆然とした。

「逃げましょう！」

その僕を引き戻したのはガイドの声だつた。

「急いで下さい。火がすぐそこまで来ていますよ！」

「えっ」

気付いた時には部屋もう炎の海の中であつた。警官達も皆逃げ出していた。

「行きましょう、このままだと丸焼けになりますよ！」

「は、はい！」

ガイドに手を引かれるようにして僕はその部屋をあとにした。扉を潜り抜けた時炎がそこから出ようとした。

何かが落ちる音がした。あの巨大なムングワの像が落ちたのである。

ろうか。

炎は僕達を追うように上に登ってきた。僕達はそれから逃れるようにして家を脱出した。

最後に家を出たのは僕だった。そのすぐ後ろで炎が燃え盛る音があった。

「終わったな」

僕は振り返った。見れば家は全て紅蓮の焰に包まれている。

炎は全てを焼き尽くさんとしていた。家は瞬く間に焼け落ちすぐに炭の山となった。

「これでムングワも死にましたね」

僕はその炭の山を見ながらガイドや医者に言った。見れば炭にはまだ火がついている。

「ええ。意外な事実でしたけれどね」

医者はその焼け落ちた家を見ながら呟くようにして言った。

「まさか人が変身していたなんて」

「アフリカにもあったんですね、人が獣に変身するのは」

この時僕の念頭にはヨーロッパの狼男があった。

「アフリカにもこうした話がありますよ」

館員はそんな僕に対して言った。

第十六章

「狼男はいませんがね」

「わかりましたか」

「ええ。変身といえは皆まずそれを思い浮かべますから」

そうだった。僕も狼男のことはハリウッドの映画で散々見てきた。

「アフリカの歴史は長いですからね。こうした話は各地にあります」

「そうですねですか」

これは少し意外であつた。

「ライオンや豹、ガゼル、中には象に変身する話をありますね。呪いや魔術等が殆どですが」

「やはり」

これはどの国も同じか。我が国の変身譚もその多くは呪術であつたり血筋によるものだったりする。その根底にはトーテミニズムがあるのだらう。

「しかし実際にこの眼で見たのははじめてです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

皆その言葉に言葉を失つた。

「まさか本当にこうして変身するとは。どうやら信仰によるものでしょうが」

「一種の魔術ですね」

「はい」

館員は僕の言葉に答えた。

「彼は信仰によりムングワに変身したのでしょうか。ムングワは彼等にとっては神だったのです」

「その証がああ巨大な像」

僕は祭壇に置かれていたああムングワの巨大な像を思い出した。

「その通りでしょうね。あの像にどんな力があつたかはわかりませんが」

彼は言葉を続けた。

「彼がムングワに変身したのはまごうかたなき事実です」

「事実ですか……」

「はい、夢ではありません」

彼は言った。

「その証拠に我々は今こうして傷を負っています」

それが何よりの証拠であった。

「それにしても手強い奴でしたね」

ガイドが前に出て来た。

「銃も全然通用しないし。正直駄目かと思いましたよ」

彼は口の端を少し歪めて笑った。

「ええ。まさかあんなに素早いとは」

僕もそれに対しては全く同意見であった。

「けれど女の笛が途絶えてから動きが鈍くなりましたね」

「あれは犬笛だったのでしょうね」

館員がそれに対して言った。

「笛でムングワを操っていたのでしよう。だから笛が吹けなくなる
と」

「自然にムングワの動きも鈍くなったと」

「そういうことです」

「成程」

僕達は館員のその言葉に頷いた。

「それでもあれは思いつきませんでしたよ」

ガイドはここで僕に話を振ってきた。

「まさか奴の口の中に散弾銃をぶっぱなすなんて」

「あれはたまたまですよ」

僕は苦笑して答えた。

「奴が僕に口を開いて襲い掛かって来ましたからね。咄嗟にああしたのです」

「それでもあんなことはそうそうできませんよ」

「そういうものですかね」

実際にまだ実感はない。あの時の光景はこの目にはつきりと焼きついているがまだ何処か夢のようである。これは何故だろうか。自分でもよくわからなかった。

「それであの化け物を倒したんですから。お手柄ですよ」

「そう言ってもらえると悪い気はしませんね」

「ええ、今からそれを祝いませんか」

ここで医者が顔を綻ばせながら言った。

「祝うとは？」

僕はそれに対して尋ねた。

第十七章

「宴会ですよ。ムングワも倒したし事件も解決した。それを祝おうじゃないませんか」

「それはいいですね」

酒の好きなガイドが身を乗り出してきた。

「それでは私も。丁度今日は休みですし」

館員もそれに賛成した。

「貴方はどうしますか？」

三人は僕に尋ねてきた。

「決まっているじゃありませんか」

僕は満面の笑顔で答えた。

「仕事のあとにはお酒はつきものです」

「わかりました」

三人は僕の言葉に笑顔で頷いた。こうして僕達は医者に連れられ勝利を祝う宴に向かった。

ふと空を見た。もう夜が明け朝日が昇ろうとしていた。

宴が終わり数日経った。僕の帰国の日がやって来た。

「いやあ、信じられませんでしたね」

僕はガイドが運転する車の中にいた。そして隣にいるガイドに対して言った。

「私ですよ。まさかムングワと戦うなんて」

彼は車を運転しながら笑顔で僕に言った。

「ええ。調べに来たら本物に出会うなんて」

「しかも戦うとは。世の中一体何が起こるかわかりませんね」

「同感です」

僕は答えた。車は今空港に向かっていた。

「おっと」

僕はここで車の天井に頭をぶつけた。

「ちよつと丁寧に運転してくれませんか」

そして彼に対し注文をつけた。

「私は丁寧に運転していますよ」

「嘘でしょ」

見ればメーターは100キロをとくに振り切っている。とてもそうとは思えない。

「いえいえ、本当に。速度の問題ではなく」

「速度が問題でしょう？」

「違いますよ。さつきは道路がへこんでいたからです」

「本当ですか？」

ここでまた頭をぶつけてしまった。

「またですよ」

「スピードとは関係ありませんよ」

「本当ですか」

その言葉は信じてはいなかった。何はともあれ僕達は空港に着いた。

「お待ちしていましたよ」

そこに医者と館員もいた。

「来てくれたんですか」

まさか見送りに来てくれるとは思わなかった。これには正直驚いた。

「何水臭いこと言ってるんですか」

「そうそう、一緒に戦った仲じゃないですか」

「………戦友ですか」

「ええ」

二人は微笑んで答えた。

「一緒にムングワと戦ったね」

「そうですか。何だか嬉しい言葉ですね」

「そりゃそうでしょう。この国では最高の褒め言葉なんですから」

医者は言った。軍人であつた彼が言つと説得力がある。

「またお会いしましょう。今度は仲良く心ゆくまで酒を酌み交わしましょう」

「それはもうやりましたよ」

「何度でもですよ。酒というのは幾ら飲んでも飲み足りないものです」

館員が言った。僕もそれには同意見だつた。

「またいらして下さい。特上の酒を用意しておきますから」

「はい、楽しみにしてます。もし日本にいらした時はこちらが」

「ええ、日本の酒を飲みましょう」

「はい」

僕達はこうして別れた。そして飛行機の中に入った。

窓の外を見る。戦友達は何時までも僕に向けて手を振っていた。

野獣

完

2004・5・26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2997f/>

野獣

2010年10月8日13時46分発行